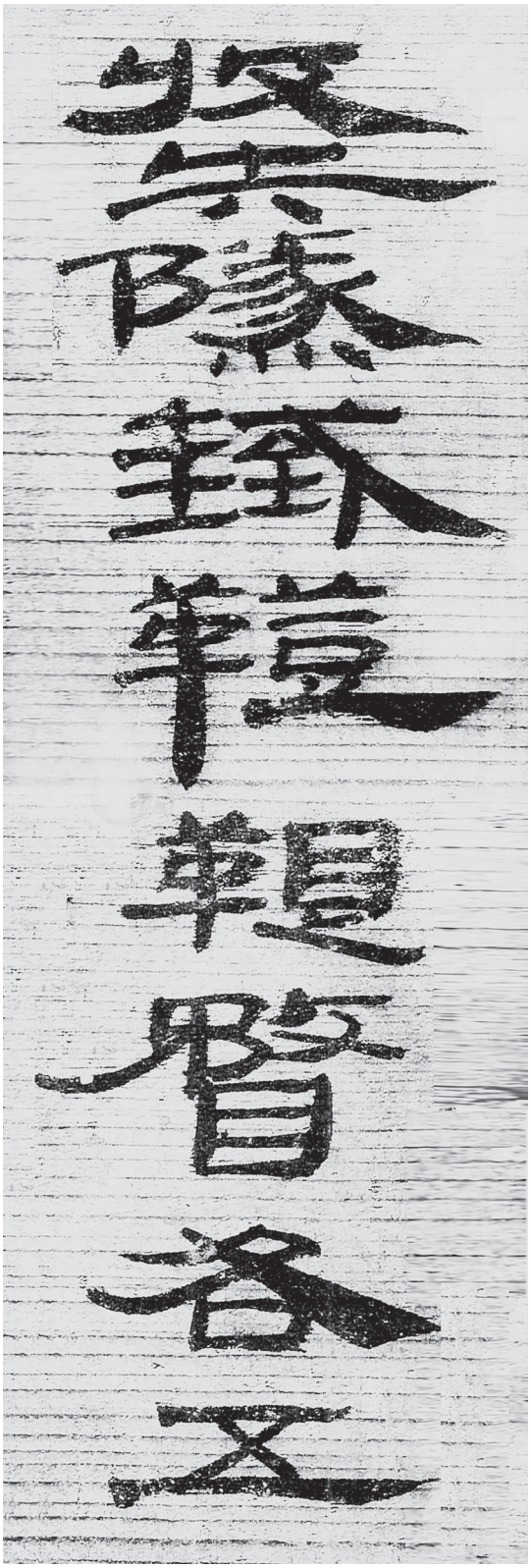
木簡（漢代）　額済納居延漢簡（えちなきょえん）



収失隧藏鞮　鞮瞀各五

『簡牘名跡選6』（二玄社）

※昇試随意部参考（半紙・条幅）としてもご活用下さい。抜粋可。

一字書（九月二十二日締切）

課題

畫

(1)書体自由
(2)半紙タテ　※ヨコは中止
(3)落款は余白に調和を工夫し書き入れる
(4)出品料　四四〇円
(5)バーコード券貼付　太枠内の臨昇の隣の空欄に**一字**と記入　段級は無記入

字典の紹介

（主に毛筆用）

●『新書源（しんしょげん）』出版社　二玄社
A5版　一四一六ページ
定　価　九、七九〇円（税込）

●『五體字類（ごたいじるい）』増補改定版
出版社　法帖図書出版　西東（せいとう）書房
B6版　七六〇ページ
定　価　三、八五〇円（税込）

昇試第一部漢字課題　（九月二十二日締切）

A

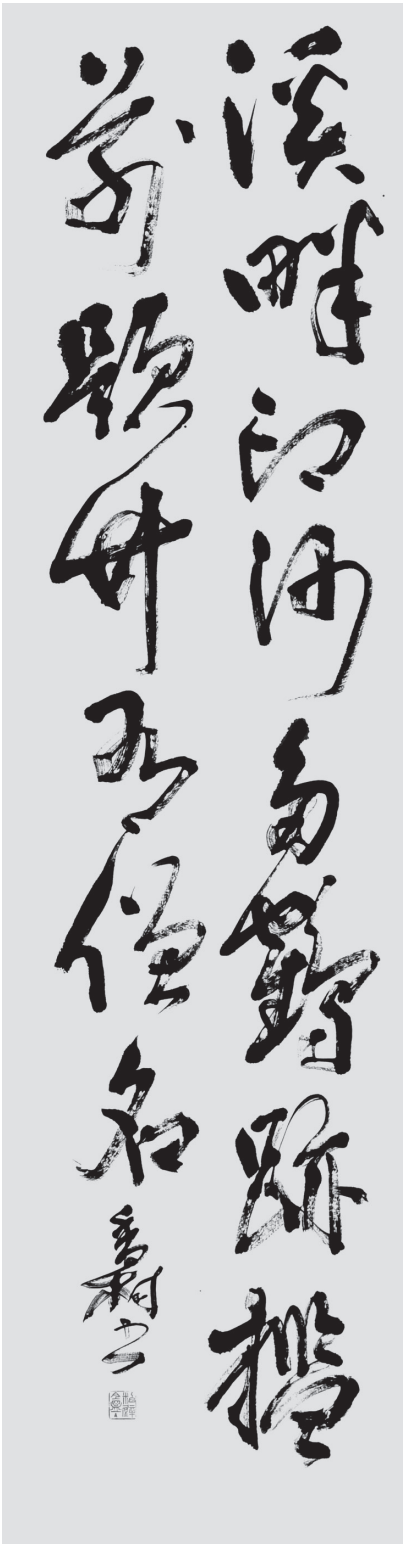
鈴木静村先生書

溪畔印沙多鶴跡　檻前題竹有僧名（李山甫）
溪畔沙に印して鶴跡多く、檻前竹に題して僧名有り。

兼毫四号中鋒。根元まで濃墨を含ませ、三字で墨継ぎ。**溪**　〝奚〟を意識が大切。**畔印**　末画縦画に変化。**沙**　字幅。**鶴**　偏は異体。**檻**　王鐸風に木偏縦長。**題**　末画ゆったり。**竹**　四画目墨の抜け不可。**僧**　〝田〟古典にあり。

B

髙橋香樹会長書



今回は、草書中心とし、行書は二文字としました。縦に伸ばせる字は「**畔・印・沙・前・竹**」数多くありますが、「**沙**」と「**竹**」を少し長くし、特別長縦画にするのはやめました。連綿線は、無理にならない三ヶ所とし、墨継ぎは迷いましたが、「**多**」と「**題**」としました。

訳…溪のほとりの砂浜に鶴の足跡が多く、檻干の前の竹に詩が書いてあるが作者は僧である。

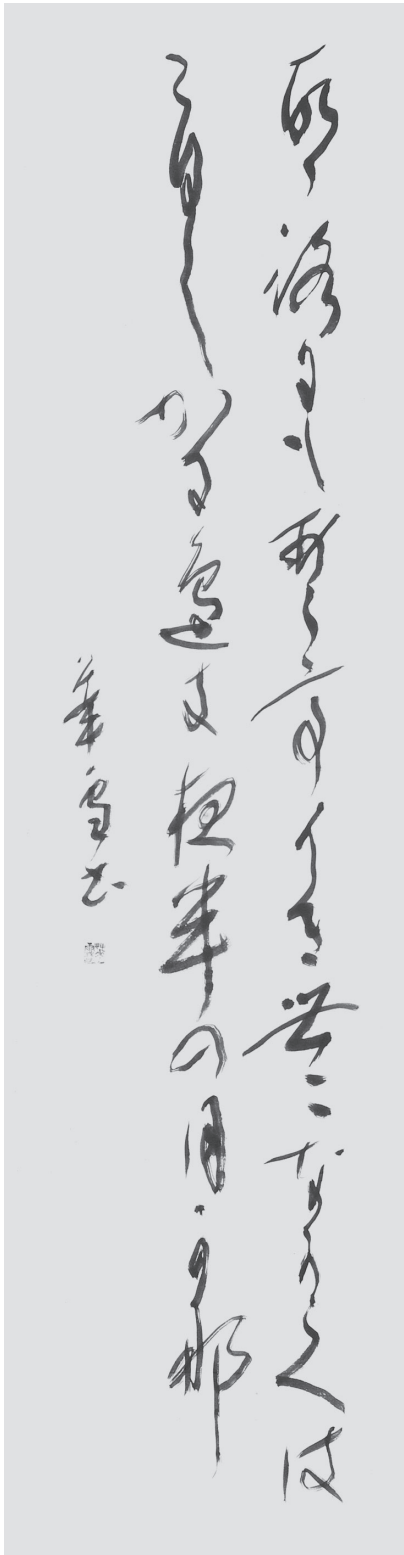
予告（十月二十二日締切）　**衆鳥高飛盡　孤雲獨去閑　相看兩不厭　只有敬亭山**（李白）

◆**注　意**　裏表紙の昇試規定を参照のこと。

昇試第一部かな課題　（九月二十二日締切）

A

平岡華雪先生書

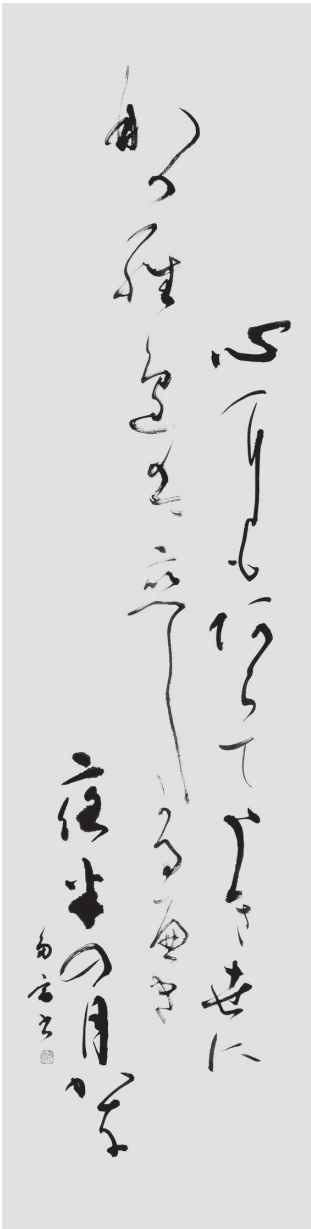


心にもあらでうき世にながらへば恋しかるべき夜半の月かな（小倉百人一首　三条院）

故、路尓もあら亭うき世二な可らへはこ日しかる邊支夜半の月可那

B

森多富先生書



心耳も阿らてうき世に那可羅邊盤恋し可る遍き夜半の月か奈

作者**三条院**は、冷泉天皇第二皇子で、母は藤原兼家の娘超子。皇太子位二十五年の寛和八年（一〇一一）に即位するも、在位五年で譲位、翌年崩御。病多く、内裏の二度の火災、道長の圧迫など不幸の多い生涯であった。

学び方

歌意…不本意にも、辛いこの世に生きながらえていたなら、この美しい夜中の月をきっと恋しく思うに違いない。

詞書によると、病気の上道長の専横に追いつめられる状況下で見る月の清澄さは、忘れがたい光でもあったことであろう。先の見えない将来を思う悲愁の御製である。

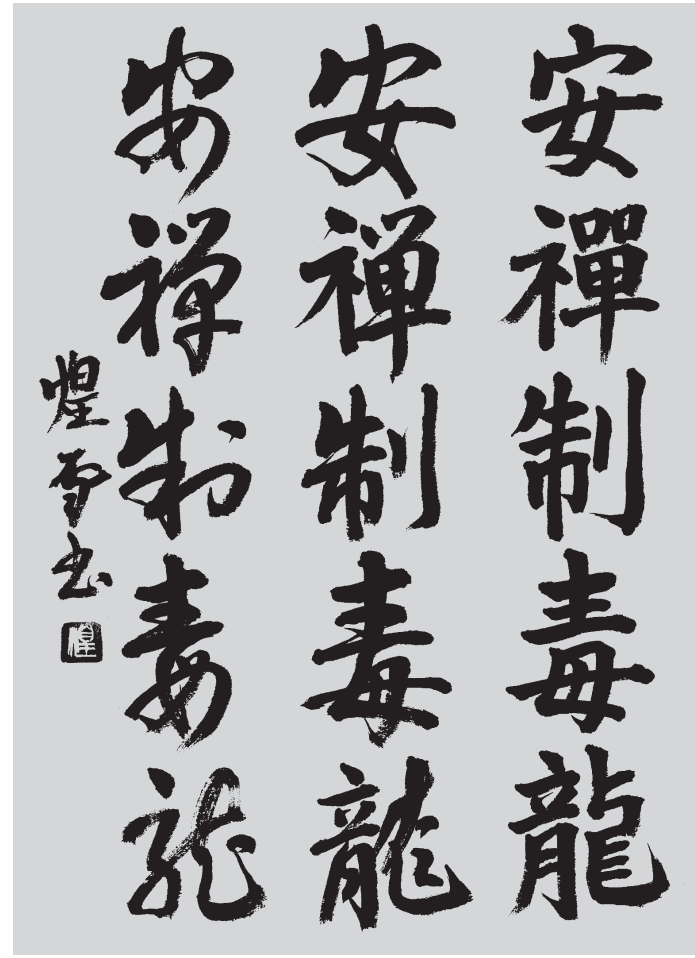
今回は三行書。前二行を並べ、三行目をそれに添わせてまとめました。筆は羊毛六号、加工紙ですが滲むものを使いました。

並ぶ二行の呼応に留意し、運筆の緩急・潤渇の自然な変化を試みました。充実した厳しい線質を今後も追求し続けたいと思います。皆さんも、色々なことに挑戦して下さい。

予告（十月二十二日締切）　**たはやすく雲のあつまる秋ぞらをみなみに渡る群鳥のこゑ**（半田良平）

◆**注意**　裏表紙の昇試規定を参照のこと。

昇試第二部漢字課題　（九月二十二日締切）



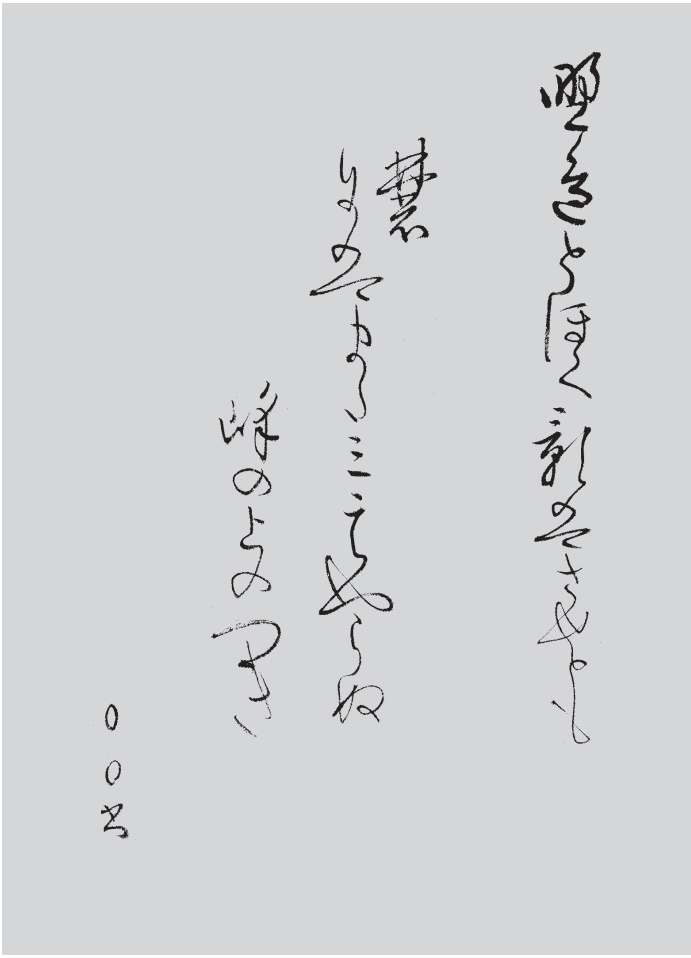
星野煌雪先生書

安禪制毒龍（王維）

安禪（あんぜん）　毒竜（どくりゅう）を制（せい）す

訳…諸人に害をなすおそろしい竜を――そしておのれの煩悩を封じこめている一人の僧の姿を、私は見た。

昇試第二部かな課題　（九月二十二日締切）



高塚竹堂先生書

野辺遠く影はさせども麓（ふもと）にはまだみえやらぬ峰（みね）の上（うへ）の月（つき）

野邊とほ久影盤（は）させとも麓尓盤（には）ま多三（たみ）えやらぬ峰の上のつき

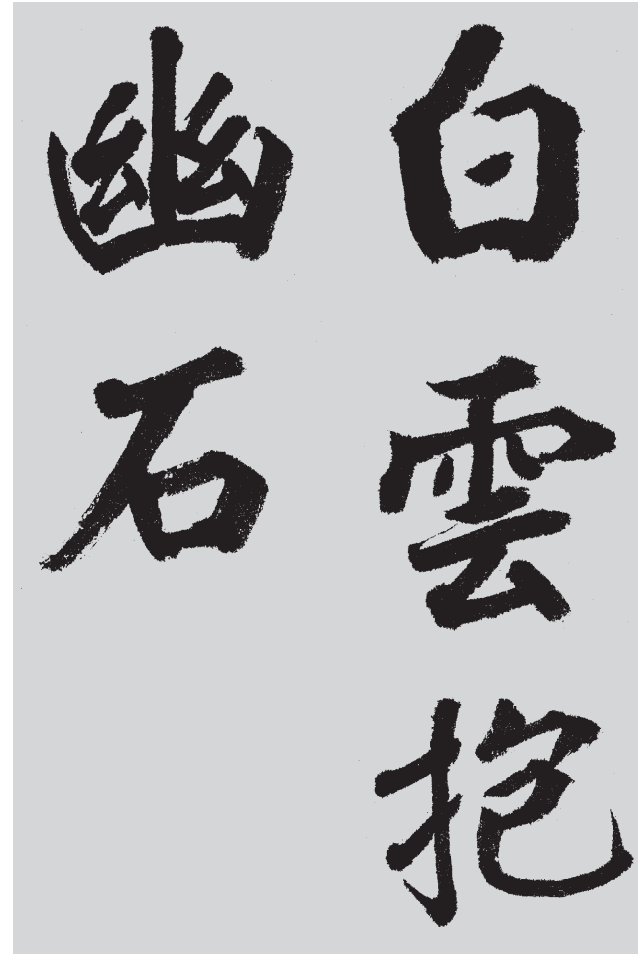
◆注 意　裏表紙の昇試規定を参照のこと。

昇試第三部漢字課題　（九月二十二日締切）

平岡華雪先生書

白雲幽石を抱く（謝霊運）

訳…白い雲がおくぶかい岩にかかっている。



〈各字ポイント〉

白　小さめで太く、接筆注意。

雲　冠大きく〝ム〟締めて。

抱　末画のびやかに。

幽　画数多く硬くならぬよう。

石　二画目が主画、長く強く。

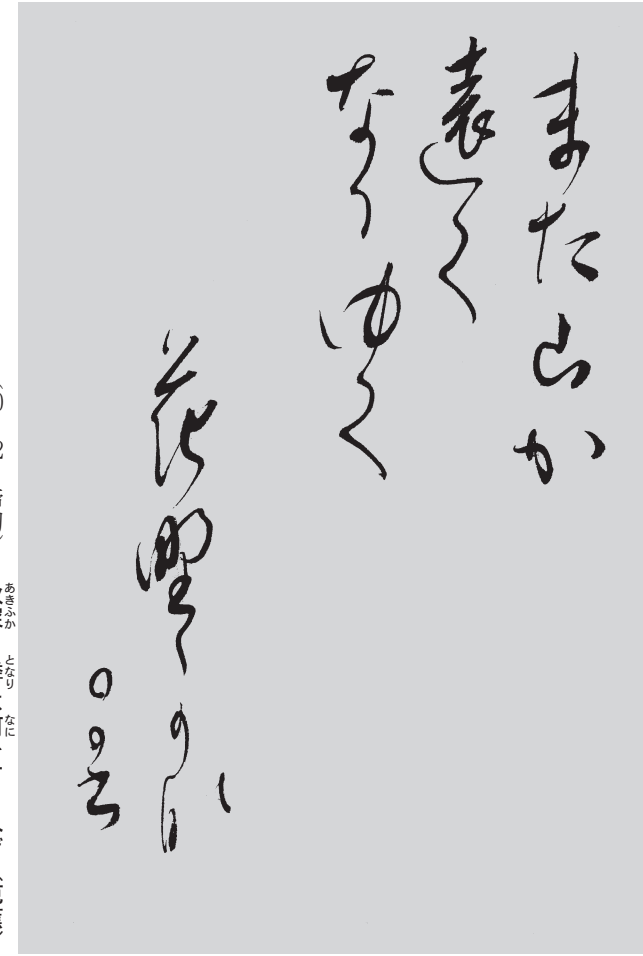
（10月22日締切）　菊花寒更香（陸游）

昇試第三部かな課題　（九月二十二日締切）

平岡華雪先生書

また山が遠くなりゆく花野かな（桜坡子）

また山か遠久なりゆ久花野可那



〈書き込みを重ね、線を鍛え〉

右群、三行の散らしは、全部二字連綿の基本形。連綿線に弛みがないこと、迷いがないことに留意し、自分のリズムを見つけて下さい。

（10月22日締切）　秋深き隣は何をする人ぞ（芭蕉）

◆注　意　裏表紙の昇試規定を参照のこと。

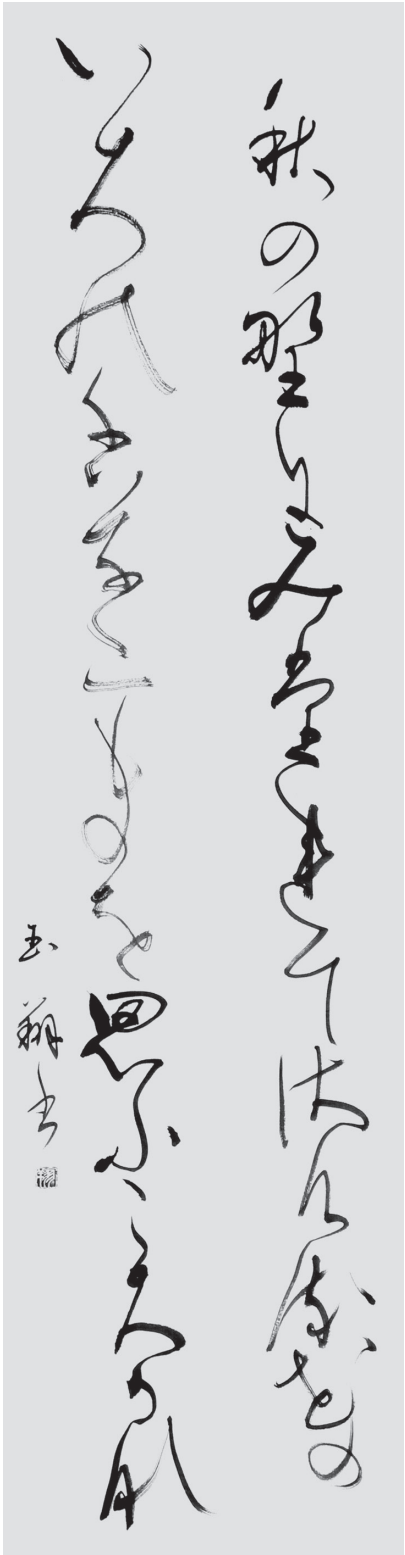
昇　試　随　意　参　考

小林伸葉先生書

山重水複人千里　月苦風酸雁一聲（高廷玉）
山重水複人千里、月苦風酸雁一声。

訳…互に千里を隔てて別れ山水はいくえにもなって遠い。一声鳴く雁は月の夜も風の夜も苦労するのである。

福田玉翔先生書



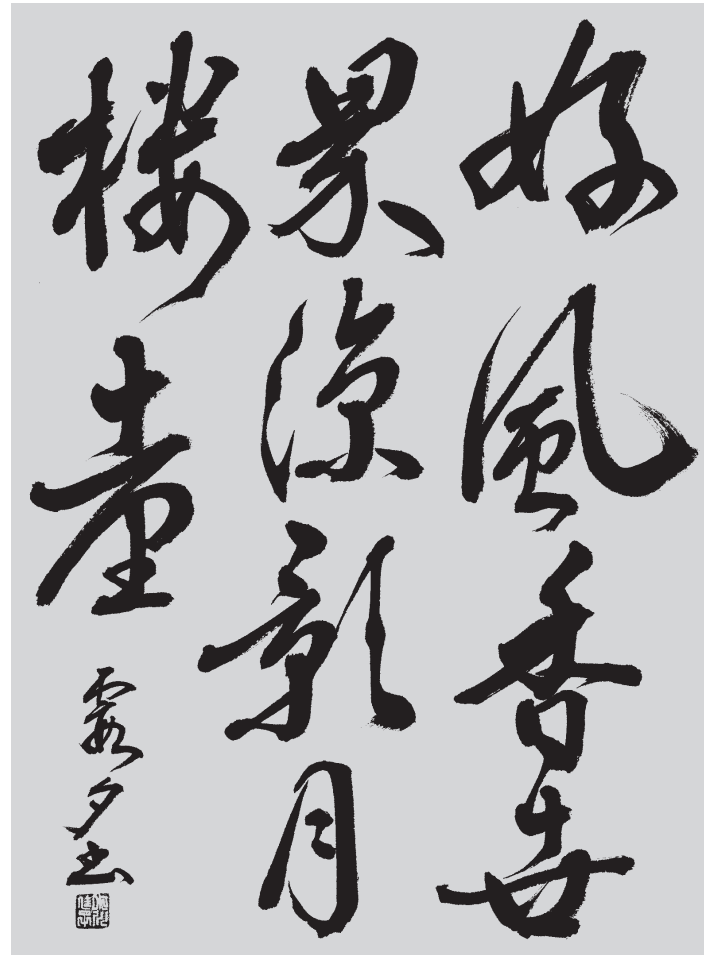
秋の野に乱れて咲ける花の色の千草に物を思ふころかな（古今和歌集　紀貫之）
秋の野尓み堂連て佐介流花のいろ能千草二ものを思ふころ可那

歌意…秋の野に乱れて咲いている、花の色の千草のように、様々に嘆きをしているこの頃であるよ。

◆注　意　裏表紙の昇試規定を参照のこと。

昇試随意参考

外川霞夕先生書

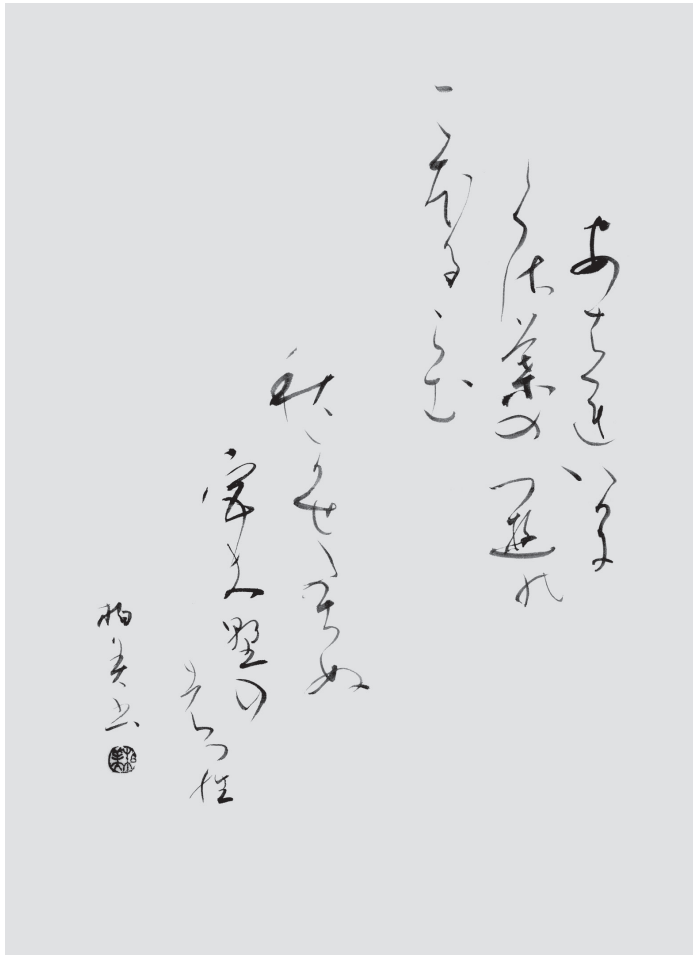


好風香世界　涼影月樓臺（査初白）
好風世界に香し、涼影楼台に月さす。

訳…よき風は蓮の花などのある所を吹き、月光が高殿に涼やかな影を落としている。

昇試随意参考

石島柏美先生書



あはれいかに草葉の露のこぼるらむ秋風立ちぬ宮城野の原（西行）
あ者連い可尓久佐葉のつ遊能こ本るらむ秋可せ多ちぬ宮支野の者羅

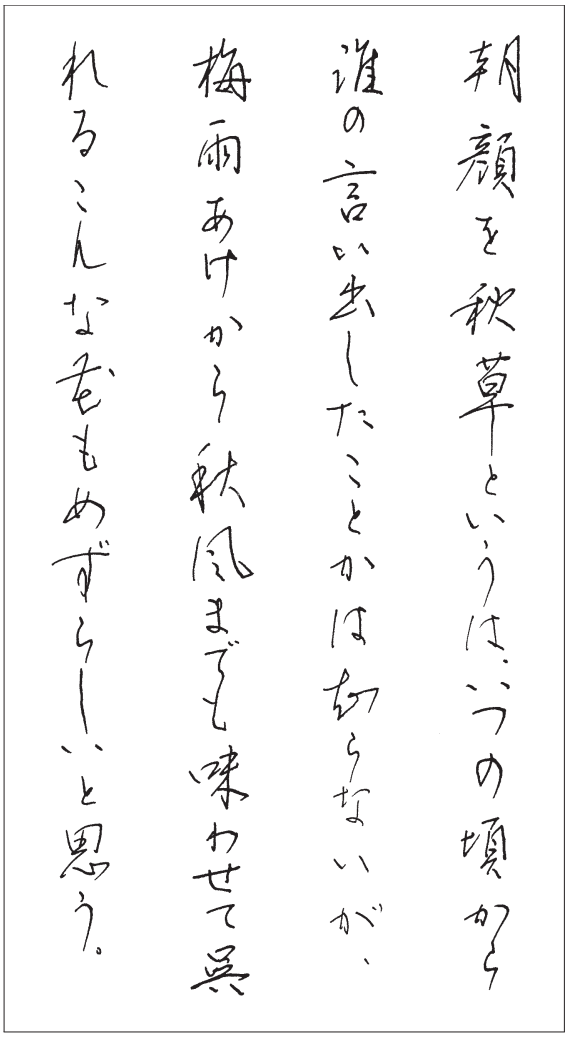
訳…ああ、どのように、草葉におく露は、いまごろこぼれ落ちているだろうか。ここにも今日は秋風が吹きはじめた。あの宮城野の原がしのばれることだ。

◆注 意　裏表紙の昇試規定を参照のこと。

硬筆部課題参考　（九月二十二日締切）

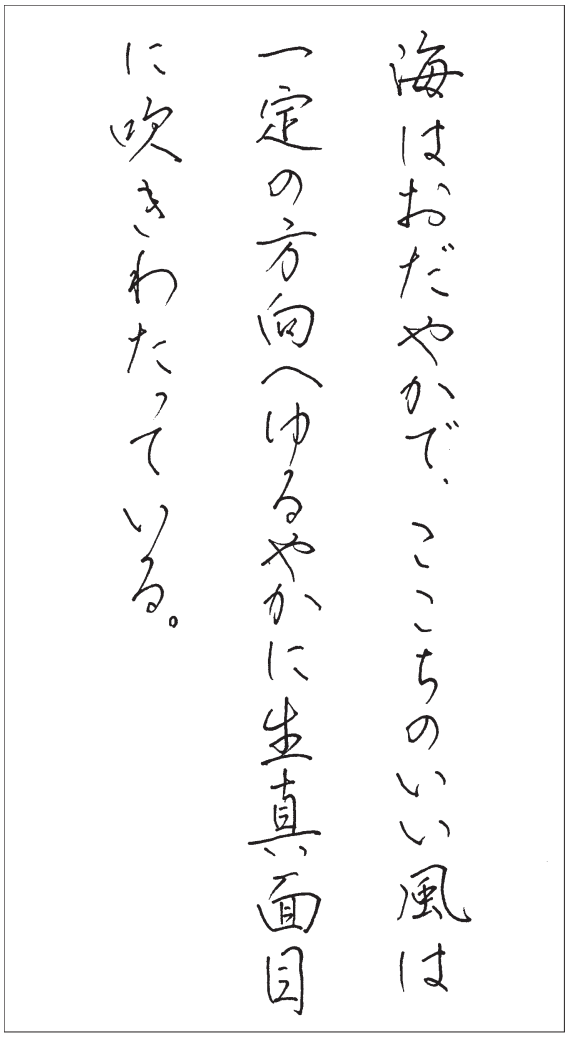
石原春香先生書

課題1（初段以上）



赤木典子先生書

課題2（初段格以下）



課題1（初段以上）
朝顔を秋草というは、いつの頃から誰の言い出したことかは知らないが、梅雨あけから秋風までも味わせて呉れるこんな花もめずらしいと思う。
（『秋草』　島崎藤村）

課題2（初段格以下）
海はおだやかで、ここちのいい風は一定の方向へゆるやかに生真面目に吹きわたっている。
（『風の道　雲の旅』椎名　誠）

◆注意

(1) 自分の段級に合った課題を選択。
(2) ペンまたはボールペン（黒色）を使用のこと。青インクは不可。
(3) 段級欄は本人が記入（色は黒）
(4) はじめて出品される方は私製の紙（3×4㎝位に）次の4項目を記入して作品左下隅に貼って出品して下さい。①硬筆部②支部名または都道府県名③氏名または雅号④新
(5) 会員は無料・会員外は四六〇円